

■ ■ ■ 編 集 後 記 ■ ■ ■

（財）日本漢字能力検定協会が選んだ 2007 年の漢字が「偽」であったことは記憶に新しいところです。相次いだ問題の内容そのものに加え、企業・団体等のガバナンスやリスクマネジメントという点でも考えさせられることが多い一年でした。

ところで、「偽」という文字について漢和辞典で調べてみると、偽＝イ＋為、つまりは人＋為＝人為であり、もともとの「人がわざとする」という意味が転じて、「いつわる・あざむく」の意に用いられるようになったとのこと。また、偽に対立する「真」（＝眞）という字も、転倒した人とさかさまになった首とをあわせ、「たおれる・ひっくりかえる」という意味だったのが、信（シン）と通じ、まことの意味に用いられるようになったとのこと。

そうすると、偽の反対は無為あるいは自然で、人が為すことは物事の自然なありように対しては偽であり、信ずることがまことに通ずるということなのかもしれません。なにやらスピリチュアルな世界に迷い込んでしまいそうです。あらためて考えてみると、真偽の間にはそんなに明確な境界なんてなく、グレーゾーンがあったり、落とし穴のある雪道だったりするのかもしれません。

ちなみに、技術士の「士」という字ですが、大地にささった棒に目印（一）をつけ、転じて仕事をする場所を表すという説もあるようです。今年も、本誌が専門分野や組織の垣根を越えた活動の目印になれば幸いです。

（第 114 号 編集担当 向井 直樹）